

第三話<バミューダトライアングルの謎>

高度一万メートル、天上には宇宙が感じられるほどに深い色が迫っていた。

眼下に広がる黄金色に輝く雲海は、まるで砂漠の中に広がる巨大な宮殿を舞台に語られる、遙か遠い昔のお伽噺の世界を覗き込んでいるようだった。

自分は今、そのメルヘンの世界へ向かっているのだ…。この、機内のなかで抱いた白昼夢が、夢でないことを確かめられるものが欲しかった。

「アメリカへは観光ですか？それともお仕事ですか？」そう尋ねてきたのは同席していた六十前くらいの紳士でした。「はい、バミューダ島まで映画を撮りに行くんです」と。そういう言葉が勝手に出てくる自分に驚きながら、ジェット機で世界を飛び回る人たちと肩を並べて今、自分がその同じ場所に居るといふその事実も、今思えば足元のおぼつかない空の上での出来事だったのです。

こうして太平洋を横切り、アラスカを経由してアメリカ大陸を縦断しながら、その広大さに自分の住んでいる場所のあまりに小さいことを思い知らされながら、機はいよいよニューヨークに到着した。しかし、あこがれの地を踏むことはなく、同じ空港内の建物の中でバミューダ行きを待った。このときは、この後のスケジュールにアメリカ滞在は予定されてはいなかった。

バミューダ行きの機内では、もはや日本人どころかアジアの匂いを漂わせているのが自分ひとりだということ、機内の西洋人の視線に感じないわけにいかなかった。

こうして何時間かを、小型になったプロペラ機に激しく揺られながら機は次第に機首を下げ、雲を抜けたとき、そこには見渡す限りの紺碧の広がりが見えました。それが大海原であることを教えてくれたのは、そこに浮かんだ真っ白な宝石のような島影でした。—そのとき機内の歓声とともに“バミューラー”というアナウンスの声が聞こえました。

島は見渡す大海原にポツンとたった一つで浮かんでいました。

なんて、美しい島だろう！！…

島へ降りると輝く陽射しは真夏のように、日本の秋の気候に合わせたスーツはあまりに似合わなかっただろう。

“SESAKI”と書かれたプラカードを持った現地の女性の車に案内されて海沿いの町のなかを走ると、そこはいつか TV 番組に見た地中海のリゾート地のように、家々の壁はパステルカラーに塗られその屋根は全て真っ白に化粧が施されておりました。

そしてその町を歩く人々の半数は黒人の人たちで、そのコントラストは互いを引き立てあつ

ていました。

バミューダトライアングル…、魔の三角地帯と称されたその場所は日本で思い描いたイメージとはまるで違うのどかな美しい島でした。